

第4回アイヌ施策推進検討会 会議録

1 開催日時

令和7年12月3日（水）午後6時～午後8時

2 開催場所

旭川市民生活館 2階講堂（旭川市緑町15丁目）

3 出席者 ※敬称略、五十音順

（1）参加者

川村 久恵、杉村 有人、坪坂 ルミエ、本間 愛之、森田 直、矢三 尚

※欠席者：大野 剛志

（2）事務局

社会教育部文化振興課 坂本課長、山脇補佐、小川

（3）オブザーバー

福祉保険部 尾藤主幹、田崎主査

社会教育部旭川市博物館 沼田館長、北島主査

同部旭川市科学館 岳副館長

観光課 浅田

4 会議の公開・非公開

公開

5 傍聴者

なし

6 議題

(1) 令和7年度事業の進捗状況、課題、今後の方向性について

(2) 令和8年度事業計画案及び地域計画の変更案について

7 発言内容

令和7年度事業の進捗状況、課題、今後の方向性について

□事務局

別紙1を基に概要を説明

■参加者

意見なし。

令和8年度事業計画案及び地域計画の変更案について

□事務局

別紙2～4を基に概要を説明

■参加者

資料3の2ページに神居古潭を「聖地」と表現しているが、聖地というとどちらかとい

うと嵐山である。「伝説の地」とした方が適している。

■参加者

個人的な話しだが、ムックルは口琴と言い、世界的にも数少ない楽器だ。鳴らすのにも非常に技術が必要で、そもそも音楽文化は保存が難しいが、動画を残すような取り組みは必要だと思う。

■参加者

ムックルを演奏できる人は何人もいて、撮影自体は可能だと思うが、ムックルを作るための技術が失われ、気軽に手に入らない状態になっている。白老、阿寒、平取では独自に技術伝承の取組を行い作り始めているが、生産した物を全道に回せるかといったらそうではない。旭川としてもそこを何とかしていく必要はあると思う。

■参加者

地域計画は5年間で終わるが、文化伝承についてはやり続けていく必要がある。そして、中長期的な成果が必要なものになるため、各年度のKPI達成などに一喜一憂せず、長期的に取り組んでいくべきなのだろう。ほかの事例だが、コロナ禍のときなど、このような計画は状況によりコロコロ変えなければならない部分もあり、この計画もあくまで現状案として、今後も柔軟に対応していくべきなんだろうと思ってはいる。順調にいかないこともあるとは思いますが、神居古潭のような実証的な取組からどんどん積み上げていくという手法がどうしても必要になっていくのだろう。

■参加者

令和8年度事業計画案の4ページ6番の事業（アイヌ文化・大衆文化のコラボレーションによる周遊促進イベント開催）はどこの課が担当なのか。どのぐらいの期間を想定しているのか。

□観光課

担当は観光課だ。1～2日ないし2～3日間で昼から夜にかけて実施するイメージ。7月か8月かで夏まつりと重ならない時期かと考えている。ざっくりのイメージとしては、焚火を実施したいと考えている。

■参加者

ちょっと暑そうだが、ビアガーデンや焚火の実施ということで夜を想定しているということか。まあ、中身を詰めるのはこれからか。駅前に行くのに、地元の人だとどうやって帰ろうかということにはなりそうだ。観光客には広く周知した方が良いので、ホテルに広報する必要があるだろう。

地域計画4－1（4）に自然素材の調査・研究・栽培とあるが、以前に使用を希望するリストを作成し、市に渡したが、その後どうなったか。

□事務局

沢山リストアップいただいたが、数が多すぎるため、一旦整理が必要だろうとは考えている。その上で、今後上川中部森林管理署との協議し、協定を結んだ上で国有林野にある素材を調達できるということになるが、現状、どこにどのような植物なりがあるのかとびうことと、生育状況なども不明であるため、調査が必要になるだろうと考えている。

■参加者

自然素材の調達については、柔軟に対応していただかないと困る。公的な取組となる場合、年度替わりの時期はなかなか動きにくいだろう。早くとも6月からスタートということになると、採れないものも出てくるので、春先のものは前年度から計画しておく必要があるだろう。森林管理署の職員はある程度植生を把握しているだろうが、アイヌ文化の関連で使う場合は、大きさなど使えるものかどうかの判断基準があるため、職員に採ってきてもらうのではなく、アイヌ自身で現地に行き、調達するべきだと思う。

以上